

<報 告>

日本統治時代の台湾生活誌（X）

柴 公 也

（37）印刷所を経営して

岡部 茂（1918年生）台北第一中学卒

父は前橋の士族の末裔です。明治維新で没落して大変貧しかったため、子供の頃に小僧として寺に預けられたそうです。小学校も途中で退学して、もっぱら寺で読み書きを習ったとのこと。向学心の強かった父は、16歳の時に検定を受けて郷里の小学校で代用教員をしておりました。

その後、軍隊に入り、日露戦争のために設けられた東京衛戍総督の佐久間大将の官舎付き伝令兵を務めていましたが、大将とその家族に大変可愛がられていました。後に、佐久間大将が台湾総督に栄転された際、父も台湾に行く決心をしたとのこと。台湾では、小学校の訓導として教鞭を執っていましたが、同僚の女教師だった母と結婚したのだそうです。

母は父より一歳下で、山形の士族の家系でしたが、やはり家は明治維新で没落していたとのこと。小学校を卒業して、山形師範に女子部の第一回生として入学したそうです。修了後は、台湾にいた叔父を頼ってはるばる単身で台湾に渡り、小学校で訓導を務めている時に父と知り合って結婚したとのこと。私は、この両親の七人きょうだいの姉三人、第三人の長男として台北の大正街に生を享けました。

その後、父は教師を辞めて台湾総督府の官吏となりました。総督府では、殖産局に所属して花蓮港に単身赴任し、移民関係の仕事に従事しておりました。総督府を退官してからは、台湾土地建物会社に勤めていましたが、写真道楽が本職となり、台北市の大正街で写真館を始めることになりました。私が建成小学校五年の時でした。一年後、写真の印刷を専門にしていた人が、ブラジルへ移民するため廃業にした印刷工場を買い受け、コロタイプ印刷を開業することになりました。

その頃住んでいた家は、洋風の平屋で、トイレは水洗でした。弟が三人できたので、家には「チャボラン（*台湾語で「小母さん」の意）」と呼ばれる台湾人の小母さんが女中として通っていました。小母さんの息子が一緒に付いて来ていましたが、私はその息子和仲良く遊んでおりました。

私が建成小学校に入ってから、当時としては立派なランドセルを背負って六年間通学しておりました。このランドセルは、父の話によると、昭和天皇が摂政の宮として台湾に行啓された際、植物園の中にあった武徳会の弓道場で御前礼射があり、弓の名手として出場した記念に頂いた物なのだそうです。

建成小学校は、一学年四クラスでしたが、一年から男女は別でした。クラスだけではなく、二階建ての校舎も東西に男女別になっていて、校門までも男女別になっておりました。ただ、設備は整っていて、プールこそありませんでしたが、立派な講堂や図書室、理科室などがありました。

制服は霜降りで、制帽もありましたが、ズボンは半ズボンでした。カバンは、私はランドセルでしたが、たいていはズックの肩掛けカバンを提げて通っていました。

朝会は毎日あって、壇上から校長先生が挨拶と訓話をしておりました。式日の時は、国旗掲揚や君が代斉唱があり、宮城遥拝や勅語奉読も行っていました。教室に入る時には、北の方角の台湾神社に向いて一礼してから入っておりました。運動会や学芸会の時は、父兄が参観に来て一緒に弁当を食べていました。

同じクラスに台湾人の級友が五人ほどいましたが、皆医者や金持ちの子弟でした。内地人の女性を家庭教師にしている者もあり、成績も優秀でした。中には、昼に使用人が弁当を運んでくる者もいました。

また、他のクラスですが、朝鮮人の生徒が一人おりました。ただ、台湾人や朝鮮人だからと言って苛めたりすることはなく、仲良く遊んでいました。私は、よく台湾人の級友の家に遊びに行っておりました。たまに喧嘩をすることがありましたが、それは民族の違いからではなく、単なる子供の喧嘩でした。

先生方は、皆師範学校を出た優秀な先生方で、台湾人の生徒を差別したりすることはありませんでした。ただ、言うことを聞かなかったり問題を間違えたりすると、廊下に立たされたり鞭で尻を叩かれました。

建成小学校を卒業して、台北一中に入学しました。同じクラスからは、五～六人入っています。当時は、補習などはなく、落ちると末広高等小学校に入っていました。台北一中の校舎は、堂々とした煉瓦造りの二階建てで、講堂やプールも完備していました。

一学年一クラス 50 人で、四クラスありました。一クラスに一人か二人、台湾人の同級生がいましたが、激しい競争を潜り抜けてきただけに皆優秀でした。内地人の級友や先生も、台湾人の級友を差別することなく、仲良く付き合っていました。軍事教練も、内地人の生徒と一緒に受けておりました。

台北一中は四年になると、成績優秀な学生は、甲、乙、丙、丁のクラスのうち、丁組に集められて上級学校の受験に備えておりました。私は、成績は悪くはなかったのですが、僅かに及ばなくて丙組に編入されました。卒業後は、台南の高等工業学校に

進学したかったのですが、四年頃から、父が体調を崩して寝たり起きたりの状態になってしまいました。

私は、下校後に仕事の手伝いをする日が多くなりました。弟三人も、まだ幼くて在学中でしたので、進学を諦めて印刷の道に入りました。その後、栄町通りにあった小塚商店（*大きな文具店で印刷も兼業）と提携して、御成町四丁目角の旧台北医専の学寮跡を借り、オフセット印刷機を入れて一般印刷へと展開していきました。

印刷所には、30人ほどの従業員がいましたが、大部分台湾人でした。皆公学校を出ていましたが、何人か女の従業員もいました。ただ、台湾人は全員福建系でいわゆる広東系（*実際には客家系）はおりませんでした。福建系の台湾人は、広東系を馬鹿にしていますが、両者は仲が悪かったのでしょうか。給料は日給で、仕事の種類によって差はありましたが、3円から4円を払っていたので、他の同業社に比べてもかなり良い方でした。

従業員の中に、父の遠い親戚で、群馬から渡って来た40代の内地人の従業員がおりましたが、なんと文盲でした。台湾人の従業員からは馬鹿にされていたのですが、字の形で覚えてなんとか仕事をこなしていました。それでも、内地から来て娘が二人いるということで、父は台湾人よりも多い日給5円を払っていました。ただ、台湾人から馬鹿にされながら仕事をするのに嫌気が差したのか、終戦前に内地に帰ってしまいました。

従業員は多かったのですが、不平不満を漏らすことなく、皆が責任を持って自分の仕事をこなしてくれたので、トラブルは全くありませんでした。時には、全員で慰安旅行に出かけ、親睦を深めておりました。市場や商店の台湾人とも友好的に付き合っていて問題はありませんでした。確かに、台湾人は内地人よりも生活のレベルは低かったのですが、馬鹿にしたりすることはありませんでした。

当時は、支那事変の最中で、松山飛行場から大陸に飛び立って爆撃に向う軍用機が各地に撒布する伝単（*チラシ）の印刷もしていました。主な仕事としては、公学校の教科書、教室に掛ける教材の掛図などを印刷していましたが、大東亜戦争が近づくとつれ、南方各地の地図の複製、官庁、停車場、港湾施設などの写真印刷、高層航空気象のデータや南方での食用植物、有毒植物、害虫、伝染病などの資料・冊子を多く印刷することになりました。

これらは、ほとんど台北の八十二部隊という情報機関からの発注で、大変膨大な、しかも忙しい仕事でした。最初のうちは、何のためにこんな印刷物が必要なのかよく解りませんでした。その後、仏印進駐などがあり、もしかしたら南方に進攻するのではないかという予感がしてきました。果たせるかな、昭和16年12月8日に開戦となり、「やっぱり、そうだったのか」と納得しました。開戦後、八十二部隊の主催で慰労会があり、父も出席したようでした。

非常時に入って各種物資は統制となり、印刷業も用紙を始め諸材料が入手困難となりました。幸いなことに、軍用品と教科書印刷のため工場は休転することもなく、良好な営業成績を上げておりました。しかし、戦況は日増しに不利となり、内台航路も欠航が多く、郵便葉書、切手、収入印紙などが潜水艦攻撃による輸送船の沈没で、止むを得ず現地印刷をすることになりました。それで、原版を内地から軍用機で空輸し、私たちの工場で作して、一般に供給することになったのです。

昭和20年の2月に、警備召集として徴兵されました。旭小学校で、20人くらいの若い台湾人の軍事訓練を担当させられましたが、僅か二か月で終わりました。5月31日の台北大空襲では、京町通りにあった小塚印刷工場が全焼し、全ての活字は鉛の塊と化し、事務所の方二名も爆死しました。幸いに御成町の工場は無事で、午前中は、空襲の虞があるので休みとし、午後から操業する日が続きました。しかし、再び爆撃されて印刷工場がなくなるとは困るので、板橋方面へ工場を疎開する準備を始めました。

準備の最中に、8月15日の正午から「重大放送がある」と、ラジオが報じておりました。その頃、台北は午前中に空襲を受けることが多かったので、印刷工場は午後から操業することにしていたのです。また、両親と末の姉は、いつもなら北投の疎開先に行くのが日課でしたが、その日は行かずに私と四人で正午の玉音放送を聞いていました。大変聞きづらい放送でしたが、「全面停戦」ということは、よく判りました。「残念、とうとう負けてしまったか」と呆然としてしまいましたが、ふと窓を開けて見上げると、雲一つ見えない青空が静かに広がっていました。

「今夜からは灯を点けても大丈夫だ。これで助かった。でも、これからどうなるんだ？」という不安感の中で、家族四人は黙々と昼食を取っておりました。午後、30余名の台湾人の社員も出勤して来て、「残念ですね。とりあえず、今までどおり仕事を続けましょう」と励ましてくれ、工場は操業を続けることが出来ました。

終戦後には、警察官などが台湾人に報復されたということがありましたが、私たちにはそのようなことはなく、以前と同様の生活を続けていました。私の家族の男子は、全員召集されていましたが、島内にいたので戦死は免れました。私にとっては、生涯忘れることの出来ない人生の転換点でした。

終戦後は、国民党に留用され、台湾銀行から百円紙幣の印刷を依頼されました。それで、切手類と同じく、空輸されていた原版から写真製版をして印刷しました。用紙は、透かし入りの紙を銀行が保管していて、かなり精巧な仕上がりであったと記憶しています。終戦直後の世情不安な時期であり、極秘裏に作業は進められ、警備員も銀行から泊り込みで警戒してくれました。

間もなく、国民党の軍隊が進駐してきましたが、ぼろ服に草履を履き、背にはなんと鍋や釜を背負い、よろよろと乞食のように行進しておりました。あまりの意外な光

景に、歓迎に出ていた台湾人は絶句して落胆の色を隠せませんでした。

その乞食部隊に先駆けて来台した先遣部隊によって、私どもの工場は接收され、中国軍の憲兵二名が泊り込みで警備をしてくれました。さすが憲兵ともなると、乞食のような兵士とは異なり、服装や態度も整然として礼儀も正しく、起床すると体操をし、夜は勉強するなど規則正しい立居振る舞いでした。英語が少し判るようで、私の次姉の夫が英語教師(*台北一中にも在職)でしたので、夜、話していることもありました。

接收員も良い人で、私たち父子を高級技師扱いにし、技術留用ということで、引揚げは延期してくれたので、印刷の仕事を続けることが出来ました。給料も役員待遇で高給を支払われ、敗戦国の民としての憂き目を見ずに生活することが出来ました。昭和21年12月に引揚げが決まり、工場の財務の引継ぎも友好的に完了しました。最後の送別会には、家族共々招待され、只々頭の下がる思いでした。台北駅では、社員の代表数名が列車の見えなくなるまで手を振り、涙を流して送ってくれました。これも、温和な父が常に社員たちを大切に扱ってくれた御蔭だと痛感いたしました。

基隆港からは、台南丸(*六千トン級)に乗船して三日目に佐世保の港外に着き、1月3日に上陸しました。今でも目に浮かぶのは、水溜りに出来た氷を見て、子供たちが「ガラスが落ちている」と言っていたことや、真冬でも青々と育っている麦畑、それに内地の人々、特に若い女性のリンゴのようなホップでした。私にとっては、28歳にして初めての「祖国」だったのです。

(38) 内地人の学校で

林彦卿(1926年生)台北一中;台北帝国大学附属医学専門部

父と母は、二人とも明治29(1896)年生まれで、台北の大龍公学校では同じクラスだったそうです。先生は10名いましたが、母方の祖父は、国語学校を出た唯一の台湾人教員でした。

当時、父は裸足で登校し、頭は辮髪でした。父は、3歳の時に祖父を亡くし、7歳で祖母と死に別れ、親戚に育てられました。貧乏で教科書を買う金がなく、友達から借りてきて写していたそうです。学校から帰ると、落花生売りをして家計の足しにしておりました。学校の代表として芝山巖祭に参加する時は、金持ちの級友から靴を借りて行ったそうです。

公学校を卒業して、母校の小使いになりましたが、読書に夢中になって鐘を鳴らすのを時々忘れ、先生に叱られておりました。一年後のある日、学校から休暇を一日もらったそうです。二、三日後、新聞を見ていた先生が、「おい、医学校の合格者に、お前と同じ名前の『林篤衷』というのがいるぞ」と笑いながら言いましたが、父は、

「はい、それは私です」と答えたのだそうです。当時、中学校はまだなく、公学校から直に台北医専の前身である総督府の医学校を受験できたのです。

私の記憶で一番古いのは、内地人の幼稚園に通っていた頃のもので、幼稚園には、親と一緒に日本語の面接を受けて入園しました。小学校に入学するまで三年間通いましたが、家では、父とは日本語で話をしておりました。当時は、近所の台湾人の子供と遊ぶということはありませんでした。一方、母は淡水女学校を出ていますが、全部台湾語で習ったため、日本語は出来ませんでした。ただ、結婚後に静修女学校に通ったので日本語が多少出来るようになったとのことでした。

父は、私のことを「ひこ(彦)」と日本語で呼んでいましたが、母は、「彦卿(カンキン)」と台湾語で呼んでおりました。父は、母のことを名前で「款(クァン)」と呼んでいましたが、母は、父のことを姓で「林(リン)さん」と呼んでおりました。ちなみに、家での食事は台湾料理でした。

当時、台湾人は大学を出ても総督府はなかなか雇ってくれませんでしたから、医者や弁護士になるしか道はありませんでした。それで、父は医者にするための一番確実な方法は、内地人の小学校に入れて勉強させることだと考えたのでしょう。

その父の目論見通り、小学校は、内地人の通う台北第一師範の附属小学校へ日本語の面接を受けて入りました。ちなみに内地人の生徒にも面接がありました。台湾人は、二人入学しましたが、もう一人は「穎川(えがわ)」という日台の混血児でした。附属小学校には、一クラス40名の単式のクラスと一クラス二学年で40名の複式のクラスがありました。私は複式のクラスでしたが、四年生までは男女共学でした。一つの机に男女が並んで座っておりました。終戦時の首相の鈴木貫太郎の娘は、私の一級下でした。40名のうち、台湾人は私一人でしたが、苛められた覚えはありません。

先生方は全員内地人でしたが、小使いさんは台湾人でした。内地人の先生は概して優れた人が多く、台湾人の生徒をよく可愛がってくれました。戦後、教え子たちが日本に帰った恩師を台湾に招いて歓待するのを見ても、その一端が覗えると思います。

校舎は木造の平屋でしたが、一部二階建てで、講堂はもちろんプールもありました。制服や制帽もあって、半ズボンを履き、ランドセルを背負って通っていました。

弁当のおかずは、内地人は目玉焼き、あるいは卵焼きでしたが、私ののは菲玉、または葱玉でした。友達の持って来る鱈子や味醂干しなどを弁当のおかずにしたかったのですが、私の住んでいる大稲埕は台湾人街で、日本食の食料品店はなかったのです。

夏は40分授業で、冬は50分授業でした。複式のクラスですから、40分授業の場合、20分経つと、カンカンと二回鳴ります。すると、先生は、一年生に自習を命じて、二年生の方へ教えに行くのです。ただ、作文や修身は、一・二年一緒だったように思います。図画、手工、音楽、体操もありました。四年生からは、理科もありました。それぞれ特別の教室があり、理科などは実験室で授業をしておりました。父は、

内地人の学校の教育環境の良さを充分承知の上で、私を内地人の小学校に通わせたのです。

小学校一年の時、男の先生から「林君は、どこの国の人か」と聞かれた時、「支那人です」と答えた記憶があります。先生は静かに、「あなたは立派な日本人です。支那人と言ったら笑われます」と言いました。しかし、授業の後、級友たちは別に変な目で私を見ませんでした。ちなみに、六年間、級友たちから悪口を言われたことはありませんが、台湾人だからという理由で差別されたことは一度もありません。

ある日、同級の颯川という女子生徒に「あなたリーヤね」と悪口を言われたことがありました。その女子生徒の父は陳姓の台湾人弁護士で、母は内地人でした。本人は、母親の内地人の籍に入っていたのです。

小学校四年の時、「女の子は20歳位になると、自然に子供を産む」とか、「女一人だけでは子供は生まれぬ」と、皆で話し合っていました。すると、先生が怒って、「こんな話をすると、張本人はお前だろう」と言って、私を呼び出して、女生徒や一年下の三年生(*複式クラスだった)の前で、私にビンタを張ってきたのです。そして、「お前は、近所の悪い台湾人から、こんな汚らわしいことを聞いてきたんだろう」と吐き捨てたのです。最後は、学校の給仕に電話を掛けさせ、私の母を学校に呼び出しました。母は、余り日本語が出来ないのですが、「息子が悪かったら、うんと叩いてください」とだけ言ったそうです。

五年生の三学期、副級長を任されましたが、それまで台湾人で副級長や級長になった者はおりませんでした。私のクラスは、複式学級のため、五年と六年が一緒に、六年生には級長と副級長がいましたが、五年生は副級長だけでした。六年の時は、級長はもちろん、副級長にも選ばれませんでした。

六年生の時の遠足で、北投公学校の前を通った時に、公学校の高学年の生徒が垣根越しに「馬鹿野郎」とか「あんぼんたん」、果ては「チャンコロ」などと悪口を叩いておりました。内地人のクラスメートが「何だ、チャンコロだなんて。自分たちのことじゃないか」と言ったので、その時初めて「チャンコロ」とは、内地人が台湾人に対して使う蔑称だと知りました。

放課後は、よく内地人の友達と一緒に歩いて帰り、その家まで遊びに行ったことがありましたが、友達のお母さんや兄弟も何の隔たりもなく話しかけてくれました。また、日曜日に友達が家に遊びに来た時には、母は大根餅や台湾のおやつを出してもてなしました。

友達同士では差別なしで仲良くしていましたが、台湾人の生徒を見下げるような先生もおりました。附属小学校の主事(*校長)は、東大出のエリートで優しい感じの先生でしたが、生徒を呼ぶ時、男の子は〇〇君、女の子なら〇〇さんでしたが、私に対してだけは呼び捨てでした。

それでも、朝会の時など、全校生徒の前では、「この学校には、少数の台湾人の生徒がいる。将来、彼等は台湾人社会の中で指導的立場になる人たちだから、みんな仲良くして、絶対に『リーヤ』だとか『支那人』などと呼んではいけない」と、常々言っておりました。

私は、小学校時代から天皇陛下は現人神とは信じていませんでした。なにしろ新聞などでは、「天皇陛下は、風邪を引かれて国会を休んだ」とか、「朝、お庭を散歩されている時、足を挫かれた」などと報道されていたからです。台湾人には、天皇は人間ではなくて神様だと教えられても、納得がいかなかったのです。しかし、戦時中、大本営発表がデマだとは知りませんでした。

小学校を卒業して、内地人の学校である台北一中を受けましたが、なかなか受からず、結局、付属小学校の高等科に二年間通うことになりました。高等科は、付属の卒業生には試験はありませんでしたが、他の小学校の卒業生には試験がありました。台湾人は、自分の他に二人いましたが、一人は他の小学校から来ていました。高等科は、男女は別でしたが、一・二年が同じクラスになっていて、主に小学校五・六年の科目の復習をやっておりました。

ある時、内地人の級友から、「林醒陽や高龍功は、『チャン醒陽』、『チャン龍功』と呼ばれているけれど、君も『チャン彦卿』と呼ばれているんじゃないのか」と言われたことがありました。私は、「チャン」と聞いて反射的に頭に血が上り、脳天を拳骨で思いっきり殴り付けてやったのでした。級友は、頭を抱えて黙って引き下がって行きました。

昭和16年に台北一中に合格しました。校舎は、煉瓦造りの二階建てで、講堂やプールもありました。台北一中は、一学年200名で、四クラスありました。台湾人は、五名だけで、クラスに一人ぐらいしかいませんでした。月謝は内地人と同じでした。内地人の級友から苛められたことはありませんが、「『大林』と名前を変えても、直ぐ台湾人だと判るよ」などと陰で嫌味を言う者はおりました。

私は、中学入学前に改姓名して、「大林彦四郎（おおばやし ひこしろう）」となりましたが、特に感慨はありませんでした。改姓名前は、「林（りん）」と呼ばれていましたが、改姓名後は、「大林（おおばやし）」と呼ばれるようになりました。内地人同士は、呼び捨てでしたが、私は背が高かったし、年も上だったので、皆遠慮して「大林君」と君付けで呼んでいましたが、皆仲良しでした。

改姓名は、義務や強制ではなく許可制でした。家庭内で日本語を常用するなどの条件付でしたから、普通の台湾人には許可されませんでした。改姓名をすると、上級学校への進学や配給の面で有利になると言うので、自分から進んで改姓名していた者が大部分です。それでも、資格のある同期の張君や李君の家では改姓名をしませんでしたが、内地人の同級生からは、かえって「気骨がある」と誉められておりました。

当時は、時計や万年筆を持っている者は余りいなかったように記憶しています。自転車は、家が四キロ以上離れている者だけに許可されていました。

私は、成績がクラスでいつも二、三番でしたが、級長にはなれませんでした。また、水泳部や野球部などの運動部の主将にも、普通台湾人はなれませんでした。私の所属していた陸上部の場合、五年生が皆辞めて為り手がなくなったので、四年生の私が主将を任されました。

優秀な教師がいた反面、台湾人の学生を馬鹿にするような教師もありました。小学校の時にはいませんでしたが、中学校の時の作業担当の先生は、柔道着の帯の両端が締めた帯と平行にはならず上下となった時は、大声で「貴様、チャンコロか！帯の締め方も知らないで！」と怒鳴っていました。教練の中尉の教官も「目標、前方百メートルのチャン！」と号令を掛けておりました。また、他の教練の教官は、ニンニクの匂いが臭いと言って、陳君のピンタを張っていました。教官殿曰く、「ニンニクが食いたければ、土曜日の夜に食え」とのことでした。どうも、支那事変の頃から、台湾人の生徒に対して優越感を持ち始め、「チャンコロ」などと、馬鹿にするような風潮が生じたような気がします。

明治節の式典が講堂で行われた時、内地人の同級生に「お前、御真影を拝む時、笑ったな」と、難癖を付けられ、危うく殴られそうになったこともありました。何度か内地人の級友と喧嘩をしたことがあります。力が強いので専ら殴る方でした。先輩に殴られたのはたったの一回だけでしたが、台湾人だからという理由ではありません。

一学年上のクラスに、汪精衛政権からの留学生が7～8名来ておりました。二学年上には、2～3名の留学生がいたように記憶しています。留学生たちも、一緒に教練に加わっておりました。成績も良好な方で、一人は国文法の試験で、クラスで最高点を取ったそうです。また、二人が後でアメリカの大学の教授になったとのことでした。

私の弟は、やはり内地人の学校である台北三中に通っていましたが、内地人とばかり付き合っておりました。ちなみに、二中は台湾人の学校ですが、一学年30人ぐらい内地人の生徒が入っていました。二中で、台湾人と内地人の生徒が喧嘩をしたことがあったそうですが、先生が内地人を叱って台湾人を庇ったものですから、皆驚いていたとのことでした。

私は、昭和20年の3月、戦争の影響で、中学を四年で繰り上げ卒業しました。この時は、四年生と五年生が同時に卒業しています。我々四年卒には、5人の台湾人がおり、5人とも台北帝国大学の付属医学専門部（*通称台北医専；予科一年で本科は四年）を受験しましたが、合格したのは私一人だけでした。この時、内地人の受験者は20人で、合格者は19人でした。総督府の台湾人に対する差別は、最後まで存在していたのです。

それでも、台北帝国大学の医学部の学生の半数は台湾人でした。一部の台湾人は、

「入試は不公平だ。内地人の学生に苛められた」と言っていますが、内地人同士でもよく喧嘩をしていました。しかし、内地人は仲直りも早いのです。台湾人は、殴られても殴り返しません。その代わり、一生そのことを恨むのです。

1935年(昭和10年)、台湾始政四十周年記念博覧会が50日間、台北で開催されました。当時、福建省主席の任にあった陳儀も招待されて台湾に来ています。同行した新聞記者たちは、帰国後、異口同音に博覧会の素晴らしさ、台湾の進歩の様子を誉めそやしたそうです。蒋介石への電話に、陳儀は、「日本は、台湾で実に良い統治をしてきた。台湾人は日本人に治められて幸せだ」と答えたそうです。

しかし、日本の統治にも失政がないとは言えません。失政の第一は、台湾語の使用禁止でしょう。汽車の中で、医専の学生たちが台湾語で話をしている時に、若い内地人に台湾語を使うなど怒鳴られたことがあったそうです。また、台北二中の生徒数人が汁粉を食べながら台湾語で話している時、ある内地人に文句を言われましたが、その内地人は反対に袋叩きにされたそうです。

当時の台北には、日本の領台後に福建省北部の福州地方から来た支那人がたくさん住んでいて、床屋、洋服屋、料理屋などに従事しておりました。ただ、これらの子弟は外国籍だということで中等学校への入学は認められておりませんでした。ちなみに、福州語と台湾語は互に通じません。

向かいの床屋は福州人でしたが、支那の祝日には、店の前に大きな支那の「青天白日旗」を掲げておりました。警察は何も言わず、支那事変が始まってからも堂々と飾っていました。また、配給も少しですが、もらっていたようです。当時台北には、一万人近い福州人がいたように記憶しています。

失政の第二は、皇民化運動です。第八代田総督から十六代まで九代続いた文官総督も、支那事変の勃発した頃から、また武官総督に変わってしまいました。第十七代の武官総督の小林躋造は、政策の一環として、皇民化運動を打ち出しました。

まず、台湾人の信仰している寺廟を迷信だと決め付け、廟のお祭りを禁じました。しかし、迷信を伴わない宗教など存在しないのです。次に、台湾人の各家庭に祀ってある祖先の位牌を取り除き、伊勢神宮の天照大御神の大麻に取り換えさせました。しかし、他の国の植民地政策では、現地人の宗教には全くタッチしておりません。

また、台湾人の進学にはハンデがあり、配給や待遇も公平ではありませんでした。例えば、内地人と台湾人の間の待遇の差ですが、銀行の頭取は、一律に内地人で、同じ職位でも内地人は台湾人の倍近い俸給(*内地人には6割の外地主当てがあった)を得ておりました。

昇進の面でも差別があって、当時は50以上の郡がありましたが、50年の統治期間中、郡守になった台湾人は僅かに六名だけです。郡守の上の市長、庁長、州(*内地の県に当たる)知事に至っては皆無です。この点では、35年の統治を経て、終戦時

の13道(*内地の県に当たる)のうち5道までが朝鮮人の知事で、郡守の大多数が朝鮮人だった朝鮮とは雲泥の差です。

しかし、インドやインドネシアでは、宗主国の人間は、現地人とは桁違いの給料をもらっておりました。台湾人の進学にはハンデがあると言っても、東大の医学部には12名が進学しております。アフリカのベルギー領コンゴは、第二次世界大戦終了当時、現地人の中に大学出は一人もいなかったそうです。とはいえ、『朝日グラフ』で、一万トン級の豪華な客船の船長がフィリピン人でしたが、船長と客船と一緒に写っている写真を見て、「アメリカはやるなあ」と思った記憶があります。

軍隊においても、朝鮮人で最も階級の高かった軍人は、朝鮮王族の李垠陸軍中將は別にして、朝鮮王国時代からの軍人で陸軍大学を出ている洪思翊陸軍中將(*終戦後、部下の捕虜虐待の罪を問われ、戦犯としてフィリピンで絞首刑に処される)です。一方、台湾の場合、朝鮮より15年早く日本に統合されているのに将官級はおろか佐官級もおらず、せいぜい軍医で大尉に任官されたのが最高位の軍人でしたから、朝鮮とは天地の差です。

当時、内地人の巡査は威張っていましたが、ただ、賄賂は取らなかったのも、御馳走をしてやれば、それで済んだのです。憲兵は、皆内地人でしたが、一般人には関係しませんでした。ただ、学校を監査したりすることはあったらしいです。

台北医専入学と同時に、学徒兵に取られて半年間、観音山の山腹に駐屯しました。私が学徒兵に行く際には、父は何も言いませんでしたが、母は、「日本は、なんで支那と戦争するのかね。蒋介石は良い人なのに」と、呟いておりました。ちなみに台湾人の志願兵は、意思に反して入隊させられた者が多かったように思います。

軍隊では、他の内地人の学徒兵とは別に喧嘩もせずに仲良くしておりましたが、一度だけ、伍長にビンタを張られたことがあります。それは、伍長が話をしていた時に不愉快な感じがしたので、わざと「エヘン」と咳払いをしたのですが、それが伍長の気に障ったからでした。

台北一中の先輩に、「井上」という、父がイギリス人で母が日本人の混血の男がいて、『青い目の日本兵』という本を書いています。その中で、日本の一個中隊が支那の軍隊に降参して、部隊ごと敵方に寝返ったというようなことが書いてあります。ただ、南京では言われているような一般市民の虐殺はなかったとも述べています。

終戦と判った時は、「もう、これで死なずに済む」と、ホッとしました。私の所は、男兄弟五人が学徒兵に取られておりました。両親は、昼間は台北橋のたもとの医院で診察を続け、夜になると五股庄の成子寮に疎開しており、実に危険極まりない生活を送っていました。

戦後、ようやく医専での授業が始まりました。一年生と二年生の二年間は、主に病理学を習いましたが、留用された日本人の教授が担当しました。三年生と四年生の時

には主に臨床を習いましたが、先生は台湾人でした。ただ、講義は日本語で行われておりました。

当時は、台湾が独立するとか、支那に戻るとかなどは考えたこともありませんでした。日本は負けたけれども、台湾はこれからも日本と一緒にだと思っていたのです。確かに、国民党の軍隊が来ると言われた時、私の父のように、最初は歓迎していた者もおりましたが、嫌がっていた者も少なくありません。中には、日本に逃げて行った者もおりました。

しかし、後で我々が支那人になると判った時には、大変失望しました。支那と言えば汚職が酷くて嘘つきで、衛生も悪くて世界でも有名な落後国家と思っていたからです。その上、内地人の友達は皆送還されると言うのです。台湾人の友達はいないし、日本語も使えなくなるので心細く思いました。

終戦からすでに70年が経ちましたが、まだ台湾語や北京語は上手に話せず、常用語は相変わらず日本語です。最近では、呆け防止を兼ねて多くの学校の同窓会に出来るだけ出席するようにして楽しい毎日を送っております。

(39) 新竹高女の頃

加藤シズエ (1927年生) 新竹高女卒

両親は、大正10年、長女と次女を連れて静岡の御殿場から渡台し、父は警察官として蕃地の駐在所に配属されました。まだまだ治安が悪く、夜な夜な聞こえてくるタイヤル族同士の争いの凄まじい叫び声に怯える毎日だったそうです。

私は、台湾の新竹州竹東郡の井上温泉の山奥のシャカロー駐在所で、昭和2年に生を享けました。シャカロー駐在所には巡査が5人ぐらいおりました。巡査の世話をする台湾人も二家族いて、皆官舎に住んでおりました。台湾人の子供とは良く遊んでいましたが、言葉は日本語でした。ただ、タイヤル族の部落からは離れているので、タイヤル族の子供とは遊んだことはありません。

次第に山の生活も落ち着き、秋には職員と家族の運動会が井上温泉プールのある家族療養所前の広場で開催され、パン食い競争、綱引き、射撃競争などがあり、楽しい一日の終わりには温泉で汗を流し、家族で山を登って帰りました。

蕃地に小学校はないので、竹東小学校に入学しました。竹東小学校は小さい学校で、一学年30~40人ぐらいでした。山地の警察官の子弟は、皆一年から寄宿舎に入って団体生活をしておりました。六畳の部屋に女の子三人が入りましたが、五年か六年の上級生が下級生の面倒を見ていました。ですから、皆本当の姉妹のように仲良くしておりました。三度の食事は食堂で済まし、お風呂も毎日入れました。洗濯は小母さんがしてくれ、勉強は食堂でしていました。慣れれば、寄宿舎の生活も楽しいものでし

た。

級友の中にタイヤル族の男の子が一人いましたが、日本語はペラペラで勉強も良く出来ました。タイヤル族だからと言って苛めたりはしませんでした。毎日寄宿舎にいて、校外にはほとんど出ませんでした。外に出る場合でも厳しい門限がありましたから、台湾人の子供との付き合いは、ほとんどありませんでした。

家に帰るのは、夏休みや正月休みだけで、竹東から台車に乗って、上坪まで行き、そこから乗り物は一切なしの徒歩で井上温泉まで歩くのです。療養所の温泉宿に一泊して翌朝早く出発し、半日掛けて我が家へと登って行くのです。休みが終わると、逆の経路で竹東へ向かいました。

途中、タイヤル族に出会うことがありますが、拙い日本語で「どこに行きますか」と挨拶してくれて、大変親切でした。ですから顔に刺青をして腰には蕃刀を提げていても、全然怖くはありませんでした。

父は、私が小学校一年の時に体を悪くして退職しています。警察を辞め、苗栗の製糖会社に勤めていたのです。それで、私は一年の二学期に苗栗小学校に転校しました。苗栗小学校も一学年一クラスの小さな学校でしたが、台湾人の生徒はおりませんでした。苗栗小学校三年の4月の21日の早朝に大地震が発生し、台湾人の家が潰れて死んだ人がいました。幸い、私の家は潰れず、家族は無事でした。

苗栗小学校の三年の二学期に、家が新竹に引越したので、新竹小学校に転校しました。新竹小学校は大きな学校で、一学年四クラスありました。四年までは男女が一緒でしたが、五年からは別になりました。クラスに、二、三人台湾人の生徒がいましたが、苛めたりはしませんでした。

新竹小学校を卒業して、新竹高女に入学しました。私が女学校に入ると同時に、両親は桃園に移り、終戦まで桃園で暮らすことになりました。それで、桃園から新竹まで一時間二十分かけて汽車通学しておりました。

新竹高女は、一学年三クラスで、一クラス50人ぐらいでした。台湾人の生徒も一クラスに5~6人ぐらいおりましたが、先生方は、内地人と台湾人を区別することなく、平等に扱ってくれました。

普段は台湾人の生徒とは余り付き合いがなく、内地人の生徒と付き合いがありました。ただ、仲が悪かった訳ではなく普通に付き合いしていました。仲良くなったのは、むしろ終戦後で、同窓会で台湾に遊びに行っているうちに親しくなったのです。

新竹高女に入学した時は、スカートでしたが、直ぐ戦争が始まってモンペになってしまいました。まともに勉強したのは最初の一年間ぐらいで、後は鋤を担いで芋を植えたりしておりました。ただ、工場や軍隊には行きませんでした。

桃園の家には、台湾人のお手伝いさんが一人おりました。食材は、市場で買うのではなく、毎日来る行商から買っていました。桃園では、内地人と台湾人は仲良く過ご

しているように見えました。

昭和19年の3月に卒業して、台北の台湾軍の兵事部に勤め、和文タイプを打っておりまして。勤めて半年ぐらい経って空襲が激しくなったので、桃園に戻り、桃園飛行場に勤務して、そこで終戦を迎えました。終戦の報は、上司から聞きましたが、負けるとは思っていませんでしたから、「何で負けたんだろう」と思いました。桃園の飛行場からは、特攻機が頻繁に出撃していたのです。

終戦後は、台湾人とのトラブルは別にありませんでした。むしろ、台湾人の知人からは、「内地に帰らずに台湾で暮らさない」と引き止められました。私としては、台湾が故里ですから台湾に留まっても良かったのですが、親のために翌年の三月頃、見知らぬ祖国に帰ることにしたのです。

(40) 台東高女の頃

胡（*「胡」は夫の姓）蘇 翠環（1929年生）台東高女卒

私の父は地主の息子で、台北医専を出て彰化で医院を開業しておりました。父の兄弟は五人いましたが、四人が医者で、一人は仙台医専を出て北京大学の医学部の教授を務めておりました。

母の実家は彰化の塩商の富豪で、外祖父は街長を務めていました。母は、台北の第三高女を出ていますから、当時の台湾女性としては、最高のインテリでした。両親は、家でも日本語で話していたので、私は公学校に入る前から日本語を話せました。

私は、彰化公学校に入学して二年まで通いました。三年になると、父が台東に移転して医院を開業したので、台東公学校に転校しました。台東公学校では、四年の頃まで休み時間に台湾語で話をする級友たちもいましたが、五年頃からは皆日本語で話すようになっておりました。

公学校の頃、私は靴を履いていましたが、級友たちの中には裸足で通っている人もいました。服はワンピースのスカートで、髪はオカッパにしてランドセルを背にして通っていました。ただ、そんな人は二～三人で、他の人は風呂敷を手にして通っていました。弁当は、私の場合、昼になると家の召使が運んで来てくれました。

台東公学校には受験組があって、五年と六年、それと高等科が合併したクラスでした。受験組は全部で60人ぐらいでしたが、女子は20人ぐらいおりました。内地人の宮脇先生が一人で担当していて、卒業後は、ほとんどが上級学校に進学しております。

台東高女は一学年一クラスで、50名が在籍していました。そのうち、台湾人は20名ほどでした。一年上の一回生には、アミ族の人が一人いましたが、二回生にはおりませんでした。

台東高女の制服は、セーラー服にスカートでしたが、戦時下ということで、三年からはモンペになってしまいました。カバンは手提げカバンでした。

先生方は皆内地人で優しく、めったなことでは怒りませんでした。作法の先生と音楽の先生は女の先生でした。

作法の時間は、畳に正座させられたので、授業が終わると、皆脚が痺れて引っくり返っておりました。お茶やお花の授業もありましたが、いつも後ろの方に座って脚を崩して座っていました。裁縫は、洋裁と和裁があり、刺繍もありました。料理もありましたが、日本料理を習いました。

内地人の級友たちとも仲が良く、喧嘩したり苛めたりすることはなく、先輩にも苛められることはありませんでした。先生方も台湾人を差別することなく、公平に教えてくれました。厳しい競争を潜り抜けてきた分、台湾人の方が内地人よりも良い成績を取っていました。私は、クラブには入っていませんでしたが、走るのが得意でした。また、三味線を習っていましたが、父に「芸者になるのか」と叱られたので止めてしまいました。

私の家は国語の家でしたが、改姓名はしませんでした。友人たちの中には改姓名をした人も何名かおりました。ただ、学校の中では、改姓名をしていない台湾人の生徒も、全員日本名を付けて呼び合っていました。私は、父に「和泉環(いずみ たまき)」と付けてもらいました。学校ではもちろん、家でも日本語だけで話していたので、台湾語は聞けても話せませんでした。

三年からは農家の手伝いに行って、田植えや稲刈りをしておりましたが、工場や軍隊などには行きませんでした。

女学校は四年で卒業しましたが、先生になりたかったので、さらに一年間の教育専攻科に進みました。台湾人は二人だけでしたが、直ぐ終戦になってしまいました。終戦の報せを聞いても、まだ子供だったので、特別な感慨はありませんでした。

ただ、その後に進駐してきた国民党の兵隊を見て、こんなレベルの低い人たちが祖国の軍隊なのかと失望してしまいました。当時は、自分のことを内地人とは違うが、それでも日本人と思っていたのです。

それでも、終戦後に卒業証書を頂いて、母校の台東国民小学の先生になりました。その後、30年間教員を務めて退職し、今は夫と共に年金生活者として毎日を過ごしております。

*稿(16)が脱落していたので、以下に掲載する。

(16) 新高山のふもと

顔 洪愛 (民族名; アドゥス・ババ、日本名; 馬場愛子) (1931年生)

チウシンロン教育所

私は、1931年に高雄州の新高山(*現在の玉山; 日本時代は標高3952メートルで、日本一の高峰だった)のふもとのチウシンロン社(*「社」は内地の部落にあたる)で生まれました。名前の「アドゥス」は私の個人名ですが、「ババ」は父の名ではなく家族名です。両親は先住民のブヌン族ですが、教育所の出来る前の世代ですから、全くの無学でした。

ブヌン族は、タイヤル族のように刺青を入れる習慣はありませんが、上の側切歯か犬歯を抜く習慣がありました。何でも、話す時や笑う時に、白い歯の間から赤い舌が覗くのが大変魅力的だからだそうです。ただ、この抜歯の陋習は私の世代からは止めています。

家は木造でしたが、屋根や壁は萱で葺いておりました。床は土間で四隅には寝台を置き、中央には石を三個置いて竈にしておりました。ただ、チウシンロン社では、タイヤル族などとは違って死者を家の中に葬るということはなく、山中に葬っておりました。

電気はもちろんなく、灯りはランプでした。水は山の上から竹の樋で引いてきて使っておりました。鍋一つで調理し、木の皮で作った匙で掬って食べておりました。

当時は、米はまだなく、粟と芋が主食でした。おかずは、畑で採れた野菜と、猟で仕留めた鹿や猪の肉、それと谷川で獲れた魚などでしたが、栄養は十分足りていたように思います。現在では、山での狩猟や川での漁撈は禁止されています。

服は伝統的なブヌン族の服がありましたが、防寒用に山羊や鹿の毛皮も着ておりました。女性は、インド人のターバンのように頭に黒い布を巻き付けておりました。ただ、若い女性は、布を買って来て内地人の奥さん方から縫い方を教わり、自分で仕立てた着物を着るようになっておりました。畑仕事をする時は、モンペをはいて働いていたのですが、下駄はなく裸足でした。

当時は、ほとんど自給自足の生活でしたから、金がなくても生活はできました。ただ、それでも金が必要になる場合もあるので、土木工事などの使役に出たり、タケノコ、キャッサバ、アズキなどを栽培して金に換えておりました。

私は、10歳の時、チウシンロン教育所に入りました。教育所の建物は木造の平屋で、教室は一つだけの複式の教育所でした。講堂などはありませんが、小さな運動場が付いていました。一年から六年まで40人ほどが通っていました。男女の比率は半々でした。教育所では、民族名の「アドゥス」ではなく日本名の「愛子」で呼ばれておりました。

一つの机には同性同士で座っておりました。平地の漢族の公学校とは違って月謝はなく、教科書やノート、鉛筆なども無償で配布されていましたから、ほとんどの子供が教育所に通っていました。服装は日本の着物や浴衣のような服を着て、裸足で通っていました。カバンなどはなく、風呂敷でしたが、弁当は芋を焼いたものでした。

先生は内地人の男の先生でした。科目は、国語、算術、修身、体操、唱歌、農業、裁縫などでしたが、教育所用の教科書で教えてくれました。全員一緒には教えられませんから、ある学年が授業を受けている時には他の学年は自習をしていました。先生は優しい人でしたが、悪いことをすると鞭で尻を叩かれました。私は、勉強も運動も優等生でしたから、叩かれたことはありません。

先生の奥さんには裁縫を教えてもらいましたが、本当に礼儀正しく優しい人で、懇切丁寧に教えてくれました。先生の子供とも遊びましたが、喧嘩することなどなく、仲良く過ごしておりました。

教育所では、毎日の朝会はなく、式日などに行っていました。代わりに、毎朝授業前に教育所の側にある小さな神社に参拝しておりました。また、運動会や学芸会などもありませんでした。

四年の一学期に終戦を迎えました。当時は、「一視同仁」が唱えられ、明治天皇の御製、「新高の山のふもとの民草も茂りまさと聞くぞうれしき」に詠まれているように、自分のことを内地人とは違うが、それでも日本人だと思っておりました。ですから、日本が負けたと聞かされた時には、大変悲しくて涙が溢れ出てきました。

教育所は、先生方が日本に帰ってしまったので、廃校になってしまいました。仕方なく、家で家事を手伝っていましたが、16歳の時に、親同士の取り決めで二歳上の主人と結婚することになりました。主人は、やはりブヌン族で、教育所で六年間勉強していましたから、日本語は大変流暢でした。主人は仕事も真面目で優しかったのですが、幸せも長続きせず、子供が出来て六年目に病を得て急逝してしまいました。その後は、キリスト教に入信して再婚し、このブヌンの村で暮らしてきました。

自然のままだったブヌンの村も、70年経って完全に様変わりしてしまいました。村には、国民小学(*日本の小学校に当たる)はありますが、中学以上はありません。それで、子供たちは国民小学を終えると、平地の学校に通うために村を離れます。

そして、日本時代には夢にも考えられなかったことですが、大部分の子供が大学まで通うようになりました。私の孫娘も、一人は台中の東海大学の社会学部を卒業して、現在は大学院で勉強しています。もう一人は淡水の淡江大学でスペイン語を勉強しています。ただ、残念なのは、孫たちはブヌン語が話せず、北京語しかできないということです。仕方なく、拙い北京語で話をするのですが、時々言いたいことが言えず、もどかしい思いをすることがあります。ただ、今でも日本語は出来ますから、時々日本のテレビを見て日本時代を懐かしんでおります。

私はクリスチャンですから、毎週日曜日には教会に通って牧師の説教を聞いています。もともと旅行が好きなので、これまで何度もヨーロッパ、アメリカ、日本などを回って来ました。その中でも、エルサレムを訪れて聖墳墓教会に詣でた時の感激は至福のものでした。もう八十の坂を越したので、これからは信仰の道一筋に余生を捧げようと思っております。

〈続〉